

第3章 龍野地区の未来のイメージ（将来像）

「ほどよく賑わいがあり生活と観光が共存するまち龍野」をめざして

重伝建地区やそれを取り巻く歴史的な地区、恵まれた自然環境は、龍野地区住民の生活の場であるとともに観光客が訪れる場でもあります。そのため、そこには、ほどよい賑わいが生まれ、住民の価値と来訪者の体感する価値が交流し、共存します。その交流は、童謡の里にふさわしく、優しくゆったりとしたものになります。加えて、そこにはしっかりとした経済活動が育ち、地区内で循環することによって、若い人たちが住みたくなるまちとなります。

アクションプランの実践に伴う変化とまちの姿

5年後のまちの姿

龍野の価値を通して、住民と来訪者が会えるための基礎整備や取組の準備が進んでいます。具体的には、新たなまちづくり運営組織が立ち上がり、住民同士の交流と助け合いの取組が実践されるとともに、龍野地区住民が、自分たちのまちの魅力を再認識し、おもてなしの心が醸成されています。

また、町並みに調和したサインや案内板が設置され、来訪者が安心してまち歩きを楽しんでいます。地区住民との交流を通して、龍野地区の魅力を満喫したファンが増え、リピーターとなっています。

さらに、町並み整備や空き家の活用が進み、若い世代も暮らしてみたいまちとなっています。

「生活と観光の共存」の

醸成期



10年後のまちの姿

（仮称）まちの会所や公開施設などの来訪者にとって魅力ある施設が整備され、まちづくり運営組織が、その運営を担っています。古い町家を活用した、飲食や物品販売の店舗が民間活力により増加していますが、地区を見渡すまちづくり運営組織の働きにより、全体のルールが守られ、調和が図られている状態です。

龍野地区に見所が増えて、その価値を理解する観光客が数多く訪れ、趣のあるまちの散策を楽しんでいます。

また、まちづくり運営組織は、住民の暮らしをサポートする仕組みを作り、多様な世代がともに安心して快適に住み続けたいまちとなっています。

「生活と観光の共存」の

形成期



15年後のまちの姿

龍野地区のブランド力が高まり、全国や海外から、その価値を理解する観光客が四季を通して安定的に訪れ、地区内に経済効果をもたらしています。

龍野地区に住み続けたい人が増え、若い世代から高齢者まで多様な世代が安全・安心で快適に暮らすことができます。

歴史的建築物等の修理修景事業、無電柱化や道路の美装化も進み、重伝建地区としての落ち着いた町並みが形づくられることにより、龍野地区のブランド力がさらに高められ、「住んで良かった、訪れて良かった」まちが実現しています。

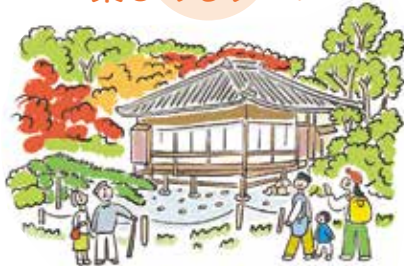
「生活と観光の共存」の

達成期



文教ゾーン

四季折々の風景を楽しむゾーン



龍野公園駐車場から聚遠亭にかけての文学の小径は、春には桜、秋には紅葉を鑑賞する人が多く訪れるエリアです。

龍野公園や龍野動物園も含め、ファミリー層から活動的な中高年層まで幅広く風景を楽しむエリアとして、案内機能の強化や周知を図るゾーンです。

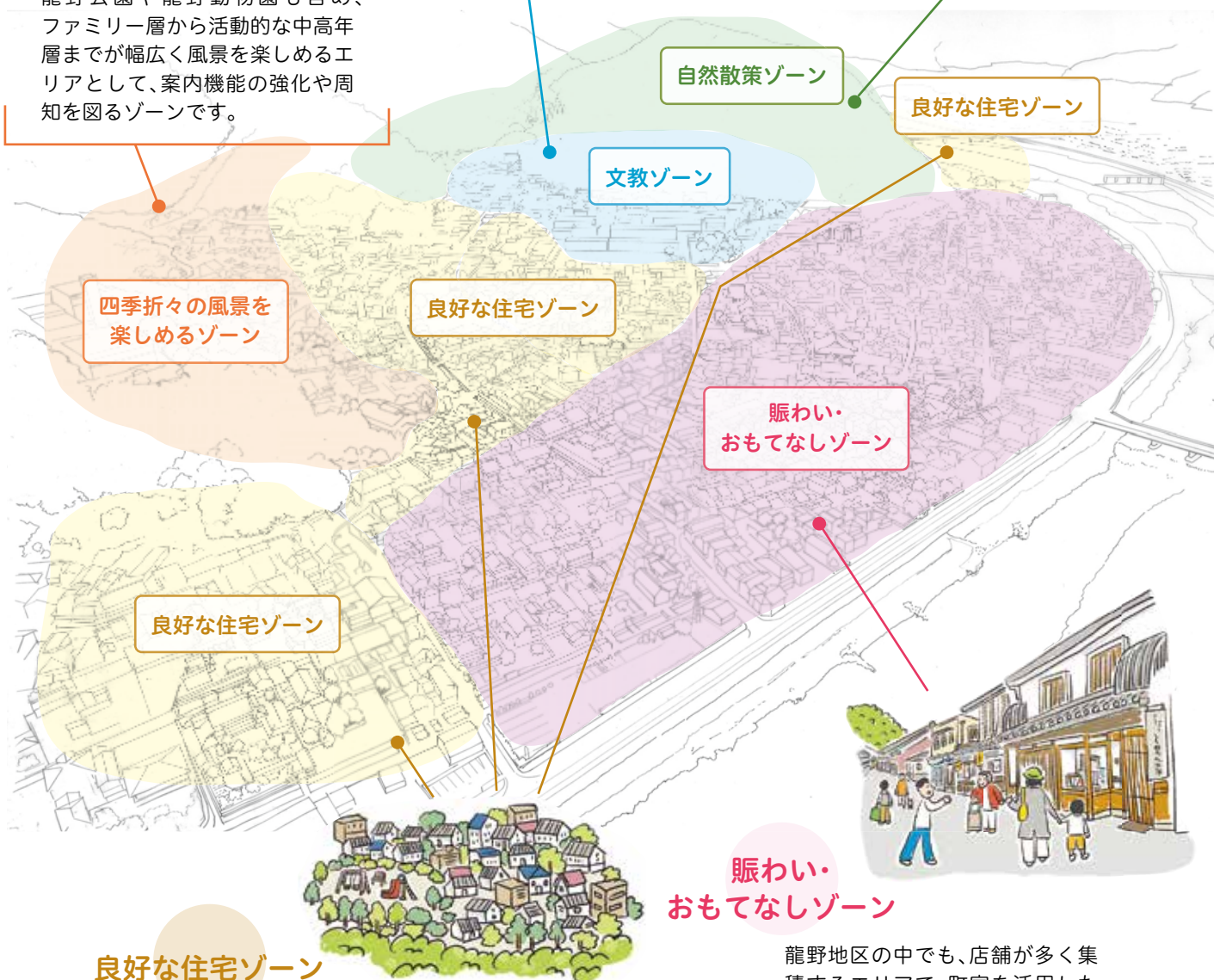


龍野小学校周辺は、龍野城や龍野歴史文化資料館をはじめとして、旧脇坂屋敷、霞城館などの文教施設が集積するエリアで、龍野地区の歴史や文化を深く学べるエリアとして、充実を図るゾーンです。

自然散策ゾーン



龍野古城や野見宿禰神社などを含むエリアで、地元住民や来訪者が散策し、景色を楽しむことができるエリアとして、充実を図るゾーンです。

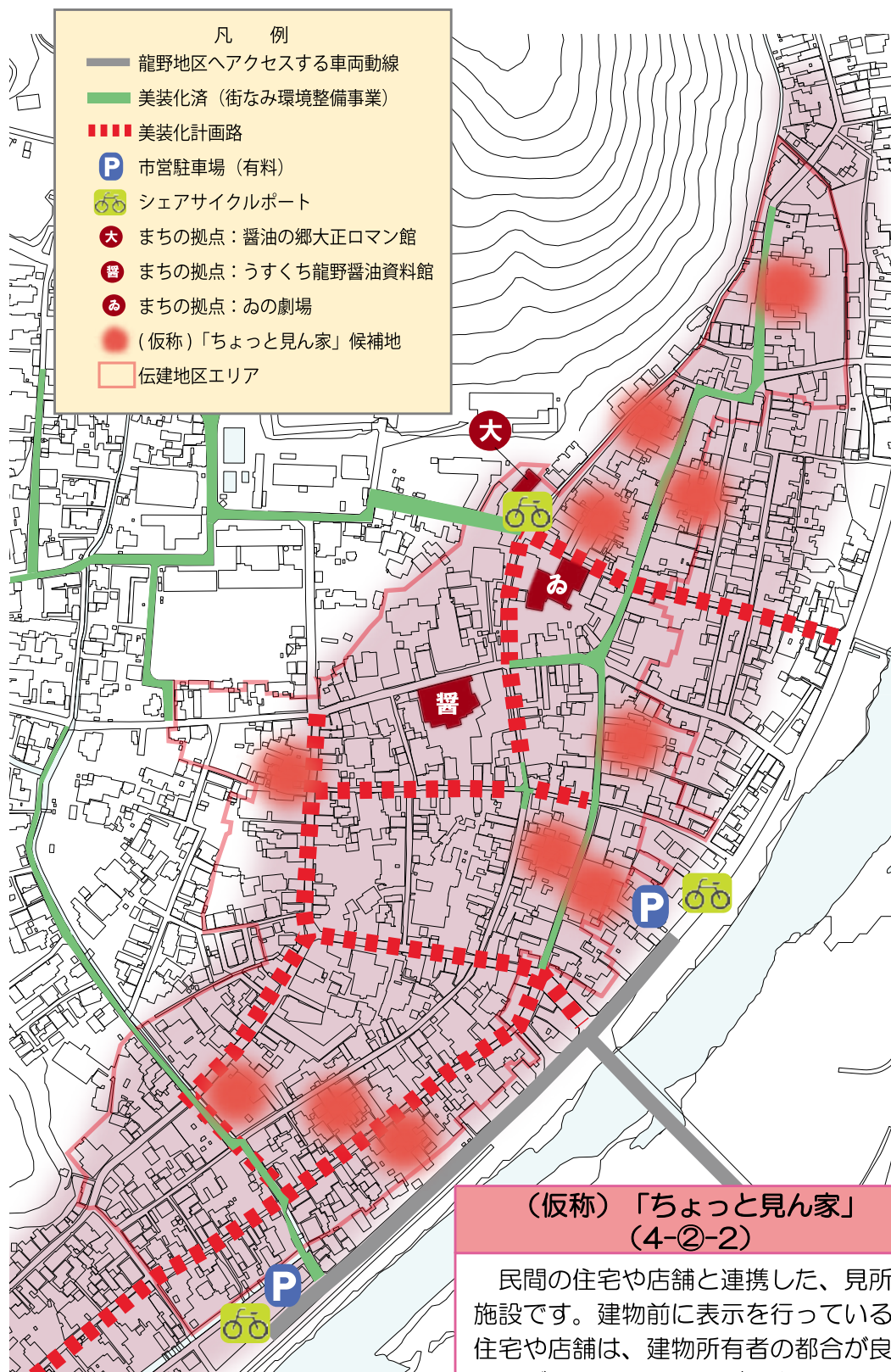


良好な住宅ゾーン

住宅が建ち並ぶエリアで、今後も良好な住宅地として、さらなる発展が期待できるゾーンです。

賑わい・おもてなしゾーン

龍野地区の中でも、店舗が多く集積するエリアで、町家を活用した新たな店舗、地元住民の交流の場、来訪者への案内拠点、公開施設などの充実を図るゾーンです。



まちの拠点

まちの拠点は、来訪者にとって魅力的な施設として、今後も重要な位置付けとなる施設です。



醤油の郷大正ロマン館



うすくち龍野醤油資料館



あの劇場



空き家活用の促進（3-③-1）

令和3年度に18地区の自治会長の協力を得て実施した空き家調査では、龍野地区内に200件以上の空き家が存在することが判明しました。

今後は、所有者の意向を伺いながら、活用できる空き家について、空き家バンクへの登録等を促し、飲食・宿泊等の商業施設やUターン・Iターンされた方の住まい、リモートワーク拠点、さらには、（仮称）「まちの会所」など、地区住民や来訪者のコミュニケーションスペースとしての利用を促進します。



2) 自然散策ゾーン

■現状と課題

含まれる地区：北龍野、中霞城

龍野古城や野見宿禰神社などを含むエリアで、山上からは龍野地区や揖保川を臨む風景を一望できるエリアです。

気軽に散策し、地区住民や来訪者が楽しみながら、リラックスできるエリアとして、ルートを説明した案内やサイン整備など、龍野地区の成り立ちを自然の中で学べる環境づくりが求められています。



3) 四季折々の風景を楽しめるゾーン

■現状と課題

含まれる地区：北龍野、下霞城、日山

龍野公園駐車場から聚遠亭にかけての文学の小径は、春には桜、秋には紅葉を鑑賞する人が多く訪れるエリアです。

龍野公園や龍野動物園も含め、ファミリー層から活動的な中高年層までが幅広く風景を楽しめるエリアとして、案内機能やPRの強化など、誰もが安心して四季折々の風景を楽しめる環境づくりが求められています。



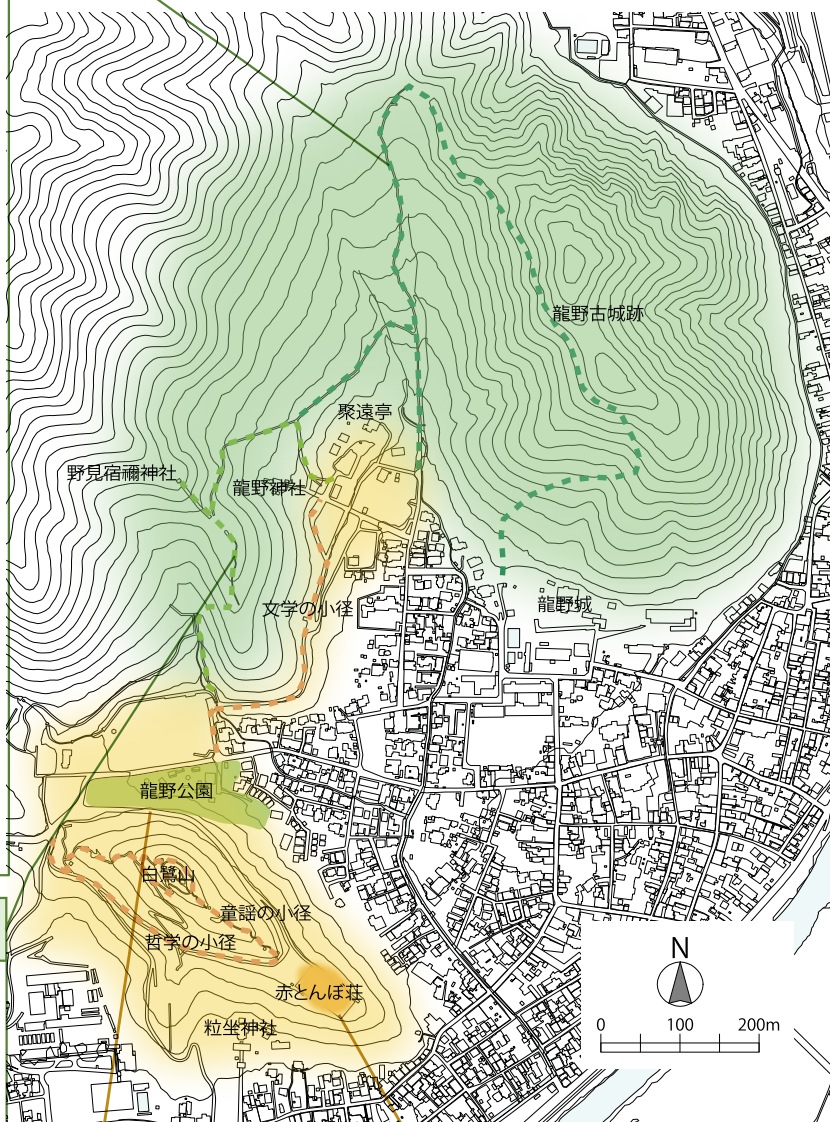
散策ルートのご案内（4-①-3）

龍野古城ルートのご案内

龍野古城は、中世の播磨を治めた赤松氏のうち赤松村秀が築いたとされる山城です。羽柴秀吉が播磨侵攻以降、秀吉配下の蜂須賀正勝や福島正則など名立たる戦国武将が城主となりました。

城跡へは、本丸御殿西側から登るルートと紅葉谷から登るルートがあります。城跡までの標高は211メートルで、初級者でも散策可能です。西播磨ツーリズム振興協議会の推進する西播磨山城復活プロジェクトの山城11（イレブン）に含まれているため、今後、山城ファンの来訪者の増加が見込まれます。

こうした来訪者が安全に楽しく散策できるような案内、サインの整備について検討します。



野見宿禰神社散策ルートのご案内

「龍野」の地名の由来となったとされる野見宿禰の墓を祀るのが野見宿禰神社です。

脇坂安治を祀る龍野神社の横から参拝できるため、このエリアは深い歴史を体感することができます。

今後は、その魅力を発信するとともに、案内、サインの整備について検討します。



誰もが安心して使える公園の整備（2-①-2）

インクルーシブとは、日本語で「包み込むような、包摂的な」という意味で、英語で「Exclude(除外する)」の対義語である「Include(含める)」が語源です。誰も排除しない社会をめざす考え方に基づいた公園整備の動きが広まりつつあるため、龍野公園内に、インクルーシブ公園を整備します。



赤とんぼ荘

赤とんぼ荘は、昭和37年の開業以来、国民の福祉と健康の向上及びたつの市の観光振興の一翼を担ってまいりましたが、令和3年4月から休憩・宿泊業務を休止しています。

今後は、見晴らしの良い立地を活用した施設として、施設の在り方を検討します。

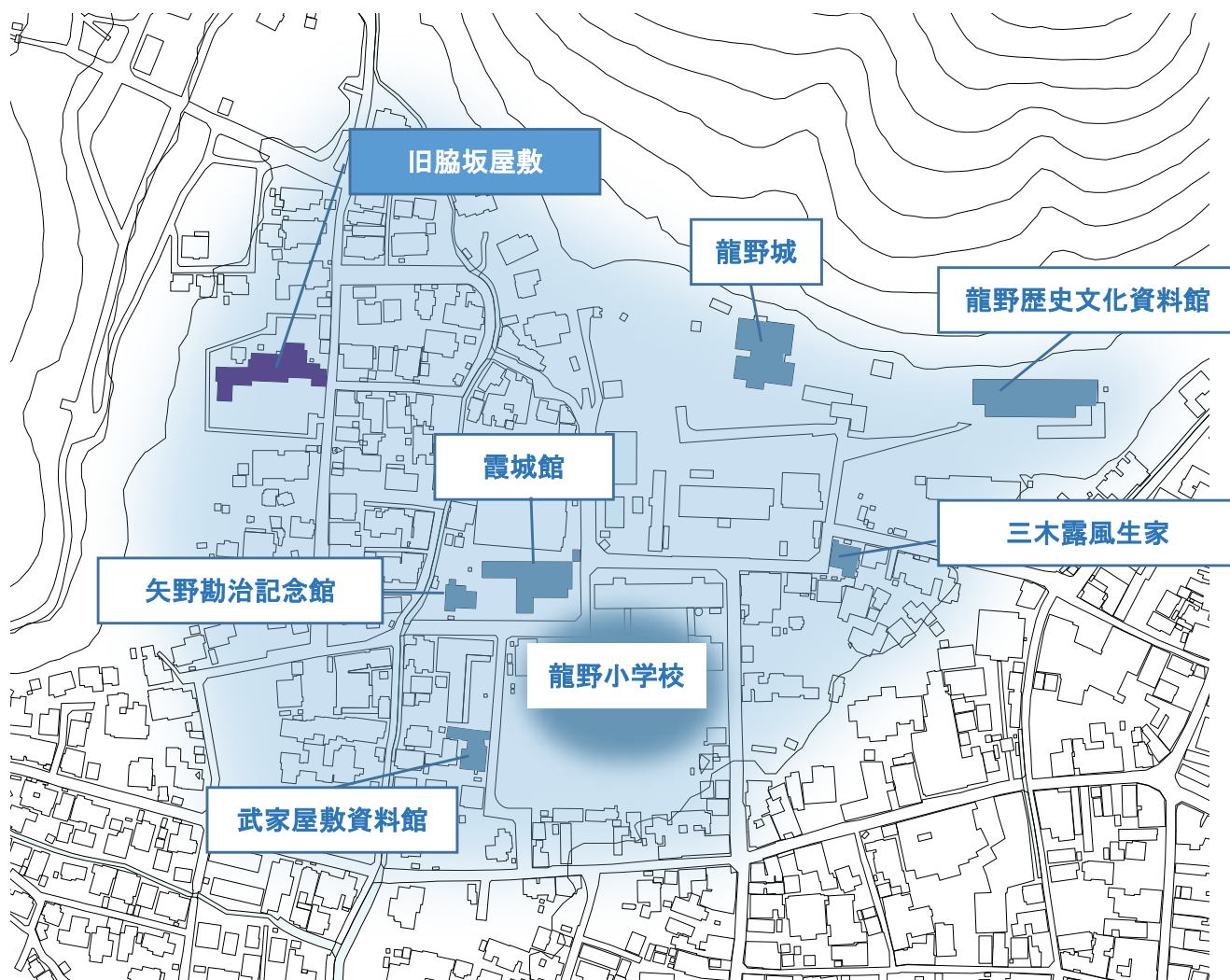
4) 文教ゾーン

■現状と課題

含まれる地区：上霞城、中霞城

龍野小学校周辺は、龍野城や龍野歴史文化資料館をはじめとして旧脇坂屋敷、霞城館などの文教施設が集積するエリアです。

龍野地区の歴史や文化を深く学べるエリアとして、学びの機会の充実など、龍野を学び、龍野を語れる人を育むことができる環境づくりが求められています。



公開施設（町並み資料館・旧脇坂屋敷）（4-②-1）

最後の龍野藩主である脇坂安斐公が、明治20年に龍野に移り住んだ際に暮らした屋敷です。江戸時代の上屋敷は焼失していたため、藩士の邸宅を屋敷に決めました。

平成16年度にたつの市が所有した後、広い敷地を公園として整備し、観光施設、地域コミュニティの場として一般公開しています。

本建物は、第1種低層住居専用地域※内にあり、用途が限られています。また、内部は、改変されていることから、改変箇所の復原などを検討し、この地域の歴史を学べる資料館として位置付け、地区住民や来訪者へのPRを推進していきます。



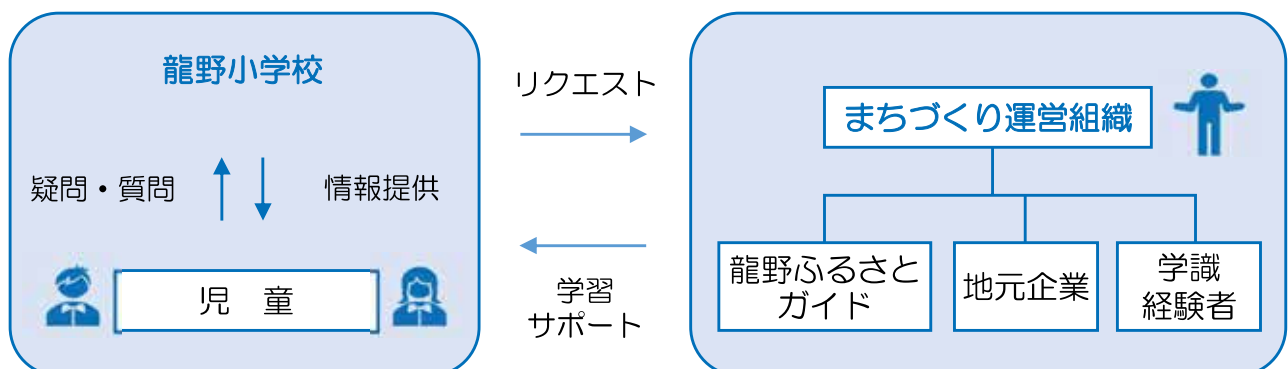
※第1種低層住居専用地域

低層住宅に係る良好な住居の環境を保護するため定める地域

建築できるもの：住宅、店舗等兼用住宅、図書館、神社、老人ホーム等

小学校と連携した「ふるさと学習」機会の提供（1-③-2）

龍野小学校の授業で実施するふるさと学習において、市教育委員会や龍野ふるさとガイド等と連携し、小学生の学びをバックアップする体制づくりを行います。



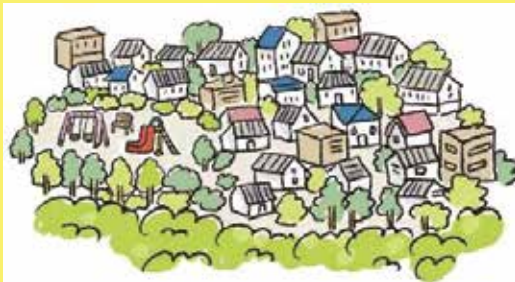
5) 良好な住宅ゾーン

■現状と課題

含まれる地区：北龍野、龍野新町、福の神・立町、下霞城、日山、日山山下、日山河原、日山住宅

住宅が建ち並ぶエリアとなっており、昭和後期からの住宅地と近年の開発エリアが点在しています。

伝統が息づく龍野地区の中で、良好な住宅地として、若い世代やリタイア世代など多様な世代が住み継ぐことができるまちづくりが求められています。



住民が考え、育てる公園やコミュニケーションの場づくり（2-①-2）

最初から作りこんでしまう公園ではなく、使い方のルールを含めて、住民が考え、育てる公園やコミュニケーションの場づくりを推進します。



グリーンスローモビリティの運行（4-①-2）

高齢化が進行しても、お年寄りをはじめとした誰もが住みやすい地区とするため、時速20km未満で狭い道も運行可能なモビリティの運行を推進します。



カート型の車両
出典：国土交通省



バス型の車両

2. 協働の取組

龍野
地区
全体
協働

まちづくり運営組織の設立（5-①～④-1）

■現状と課題

龍野地区には、愛着と誇りを持って活動が続ける団体や個人が数多く存在しますが、それらは、一部には連携を図っているものの、個々の活動は内向きの傾向が強いことから、龍野地区全体のまちづくりのエネルギーにつながっていないのが現状です。

また、情報共有の仕組みも確立されていないため、個々の活動を俯瞰し、それぞれの情報を共有しながら、活動の相乗効果を生み出すことができる仕組みづくりが求められています。

◆取組内容

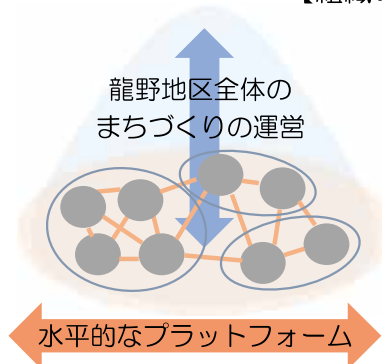
龍野地区のまちづくりを支える多くの活動団体が個々に持っているエネルギーを束ね、龍野地区全体のまちづくりの力とするため、それぞれの団体の活動の連携と協働を可能にする地域横断的なまちづくり運営組織を設立します。

この組織は、大きく2つの機能を持つものとしてイメージします。

- ①従来の活動団体がまちづくりのためにネットワーク化される水平的なプラットフォーム（コミュニケーションを図る場）としての機能。様々な活動団体が一堂に乗ることができる車体に当たります。
- ②地区全体としてまちづくりを推進するための機能。車体を動かす動力に当たります。

また、このまちづくり運営組織には、多くの地域住民が参加し、積極的に収益事業を展開しつつ、個々の活動を支援していくことを目指します。

【組織のイメージ】



＜組織の方向性＞

- ①地域住民が誰でも参加できる。
- ②収益をあげることによって持続的にまちづくりを進めることができる。
- ③既存の活動団体や組織を組み込むことができる。
- ④行政と連携する。

継続的な組織となるための
収益性の創出
(例示)

- ・有料駐車場の管理運営委託
- ・シェアサイクルポートの管理運営委託
- ・グッズ販売など来訪者からの運営協力金

情報の一元化と発信（4-④-2）

■現状と課題

地区内の観光施設や店舗の情報が一元化されていません。

◆取組内容

龍野地区内の各団体や店舗と連携した情報収集を、まちづくり運営組織の情報部門で一括して行い、アプリやSNS等による発信を行うとともに、現地では、（仮称）「まちの会所」において、対面で来訪者のニーズに合った情報提供を行います。



たつの市観光協会
ホームページ



たつの市AR
まち歩きアプリ

連携

連携

各団体・各店舗・住民

情報収集

まちづくり運営組織
情報部門

情報発信

アプリ

SNS

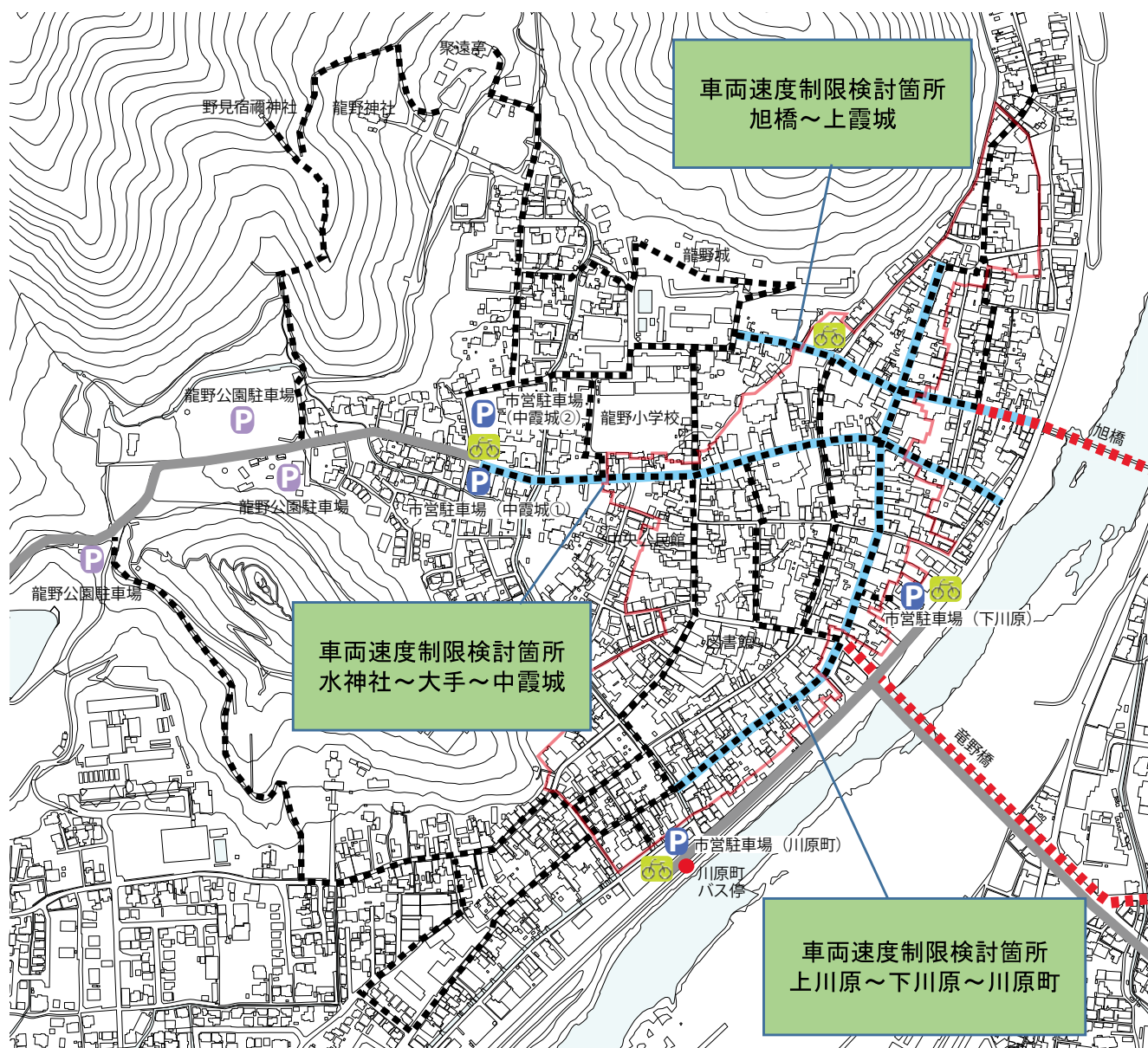
まちの会所



龍野
地区
全体
情報

3. 地区内交通計画

来訪者駐車場を地区の縁辺部に配置し、地区内への移動手段としては、徒歩、自転車、グリーンスローモビリティ等の利用を推奨します。来訪者の主要動線については、車両の速度制限を検討する等、来訪者や地区住民が安全に回遊できるルートを確認します。



電動自転車レンタル事業「たつのめぐりん」

凡 例

- 龍野地区へアクセスする車両動線
- 龍野地区へアクセスする歩行者動線
- 龍野地区内歩行者動線
- 車両速度制限を検討する動線
- P 市営駐車場（有料）
- P 公園駐車場（無料）
- 🚲 シェアサイクルポート
- 伝建地区エリア

グリーンスローモビリティ運行経路

龍野地区内は、狭隘な道路や見通しの良くない交差点が多く存在します。また、地区内には、定路線で運行する公共交通がないため、今後増加すると考えられる来訪者や地区住民が安全・安心で快適に地区内を移動できる手段として、グリーンスローモビリティの導入を検討します。

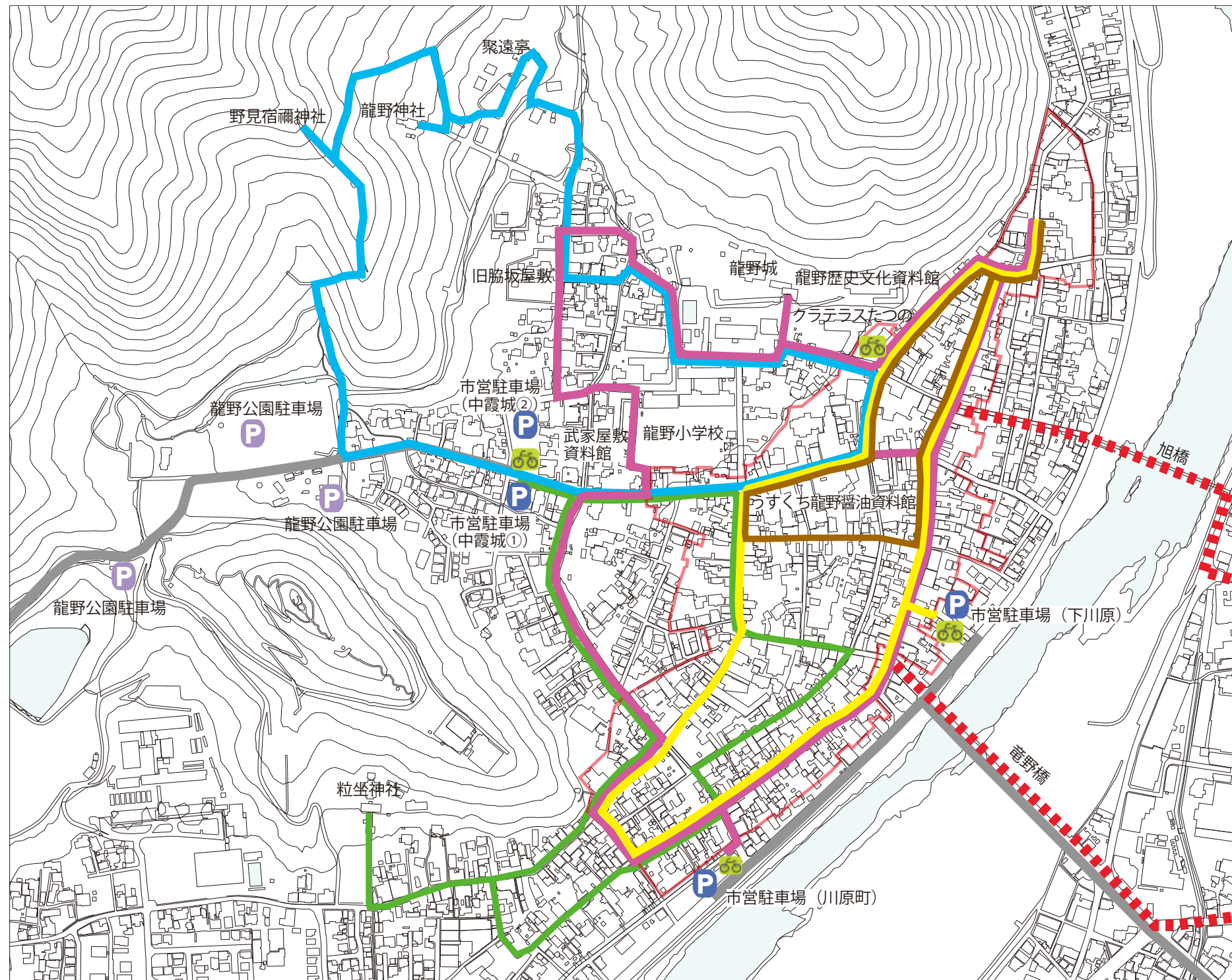


国土交通省HPより

グリーンスローモビリティとは、時速20km未満で公道を走ることができる電気自動車を活用した移動サービスで、環境への負荷が少なく、狭い路地も通行が可能であるため、高齢者の移動手段の確保や観光客の周遊に資する「新たなモビリティ」として期待されています。

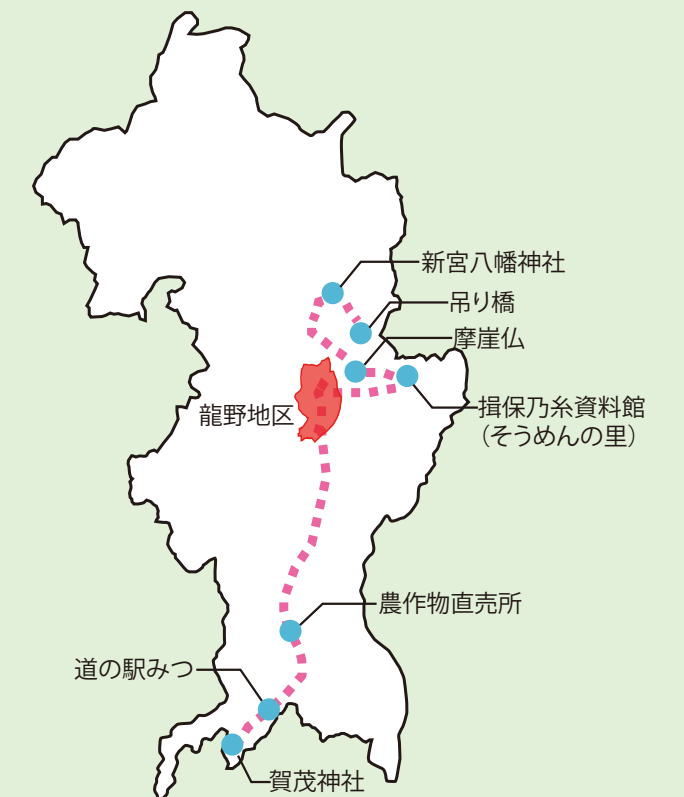
4. 来訪者の回遊ルート

来訪者が快適に地区内を回遊できるよう、テーマに沿った回遊ルートを設定し、情報発信を行います。



- 城下町ルート
市営駐車場（川原町）⇒本町⇒武家屋敷資料館⇒旧脇坂屋敷⇒龍野城⇒クラテラスたつの⇒門の外⇒下川原⇒市営駐車場（川原町）
- 醸造ルート
クラテラスたつの⇒門の外⇒上川原⇒下川原⇒大手⇒うすくち龍野醤油資料館⇒クラテラスたつの
- 重伝建ルート
市営駐車場（下川原）⇒川原町⇒本町⇒立町⇒大手⇒うすくち龍野醤油資料館⇒クラテラスたつの⇒門の外⇒上川原⇒市営駐車場（下川原）
- 自然散策ルート
クラテラスたつの⇒大手⇒龍野公園⇒野見宿禰神社⇒龍野神社⇒聚遠亭⇒旧脇坂屋敷⇒クラテラスたつの
- 昭和レトロルート
市営駐車場（中霞城①②）⇒大手⇒立町⇒川原町⇒ヒガシマル第2工場跡周辺⇒粒坐神社⇒本町⇒福の神⇒市営駐車場（中霞城①②）

龍野地区を拠点とした
たつの市観光ルート例



凡 例

- 龍野地区へアクセスする車両動線
- 龍野地区へアクセスする歩行者動線
- 城下町ルート
- 醸造ルート
- 重伝建ルート
- 自然散策ルート
- 昭和レトロルート
- P 市営駐車場（有料）
- P 公園駐車場（無料）
- 🚲 シェアサイクルポート
- 伝建地区エリア

5. 地区内サイン・案内板計画

来訪者が地区内を迷わず、快適に回遊できるよう、適切な案内・誘導情報を提供するために、適材適所にサイン・案内板を配置します。



★ 総合案内板イメージ



● ルート案内表示イメージ



▲ 伝建区域表示イメージ

第5章 今後の展開

1. まちづくり運営組織の確立と各実施主体の連携

住民主体の自立するまちづくりをめざし、本計画を推進していくためには、地区内で個々に活動している団体の活動を取りまとめ、地区全体の力にし、次代に継承していく組織（まちづくり運営組織）の存在が重要です。

そのために、人材育成と団体間の調整に注力し、収益性と経済性を持った持続可能な組織の確立に取り組みます。

そして、まちづくり運営組織、住民、団体、行政等の実施主体間の連携を強化し、地域一体でまちづくりの推進に取り組んでいきます。

2. 計画の推進

本計画に掲げる「龍野地区の未来のイメージ（将来像）」の実現に向け、新たに設立されるまちづくり運営組織を中心に、各実施主体が5つの基本柱で構成される各施策（アクションプラン）を実施していきます。

具体的には、5年後のまちの姿を「『生活と観光の共存』の醸成期」とし、住民と来訪者が出会うための基礎整備や取組の準備を進め、住民同士の助け合いが実践されるとともに、住民が自分たちのまちの魅力を再認識し、おもてなしの心が醸成される事業を実施します。

10年後のまちの姿を「『生活と観光の共存』の形成期」とし、来訪者にとって、魅力ある施設や見所を整備することにより、その価値を理解する観光客が数多く訪れるとともに、まちづくり運営組織によって、住民の暮らしをサポートする仕組みがつくられ、安心して快適に住み続けることのできる環境を整えます。

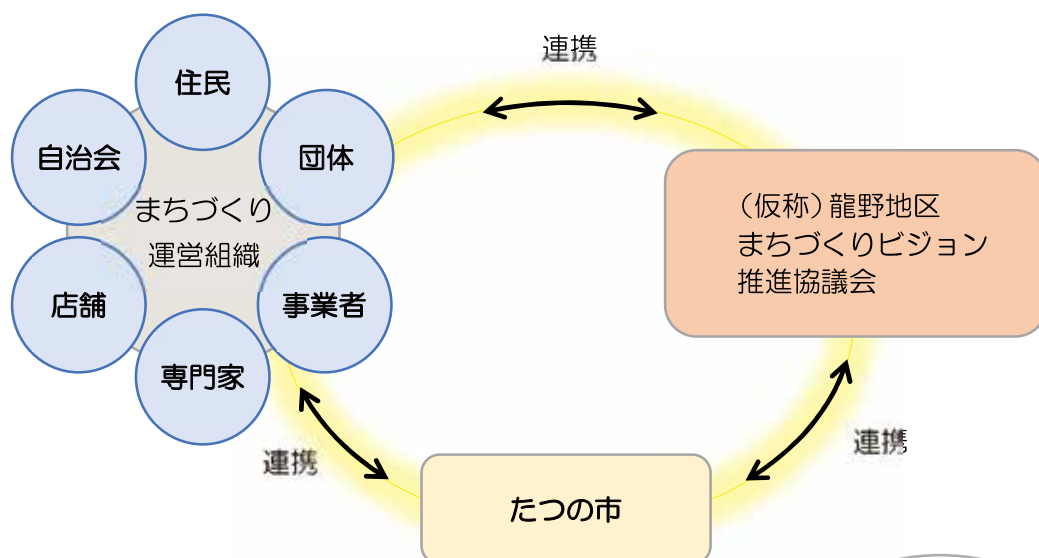
15年後のまちの姿を「『生活と観光の共存』の達成期」とし、龍野地区のブランド力を高めることで、その価値を理解する来訪者や龍野地区に住み続けたい人が増加し、誰もが「住んで良かった、訪れて良かった」まちを実現します。

各事業を実施するに当たり、実施主体は、互いに情報共有を行い、重要性、緊急性、難易度、効果等を検証しながら、新たなまちづくりの視点で取り組みます。

また、必要に応じて、実施主体間が連携と調整を図り、円滑にまちづくりが進むように努め、特に、アフターコロナにおける社会情勢の変化、住民や来訪者の価値観等の変化を機敏に感じ取り、施策に反映させます。

3. 進捗状況の確認と進行管理

現在設置している「龍野地区まちづくりビジョン検討委員会」の構成委員を基本に、（仮称）「龍野地区まちづくりビジョン推進協議会」を設置し、各実施主体の取組や事業費、費用対効果などの進捗状況を確認するとともに、本計画に基づく施策の総合調整を行います。



また、本計画の推進に当たっては、各施策（アクションプラン）の達成度や課題把握による毎年の進行管理を行います。特に、目標値として「重要業績評価指標（KPI）」を掲げた施策については、その達成状況を確認・評価することで、PDCAサイクルによる適切な進行管理を行います。



4. 龍野地区を起点としたまちづくりの全市への広がり

本計画は、龍野地区が国の重伝建地区に選定されたことを契機に、まちに賑わいと活力を取り戻し、住民の日常生活とバランスを取りながら発展することを目的に策定するものです。

一方、龍野地区以外においても、本市には、醤油やそうめん、皮革等の地場産品をはじめ、海産物や農産物、歴史や文化等、魅力的な地域資源が数多く存在します。

それらの地域資源を本市の観光資源と位置づけ、将来的には、龍野地区を起点に各エリアの観光スポットが連携し、一地区での滞在型観光から市域全体の周遊型観光につながるよう、住民と団体、行政が協働して持続可能なまちづくり活動に取り組みます。